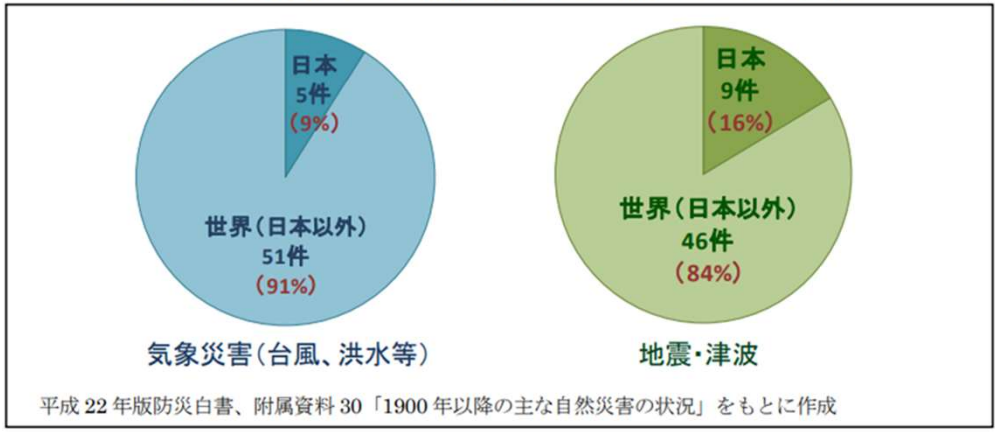
自然災害防災教育パーク

第１８回　夢アイデアまちづくり

1.はじめに

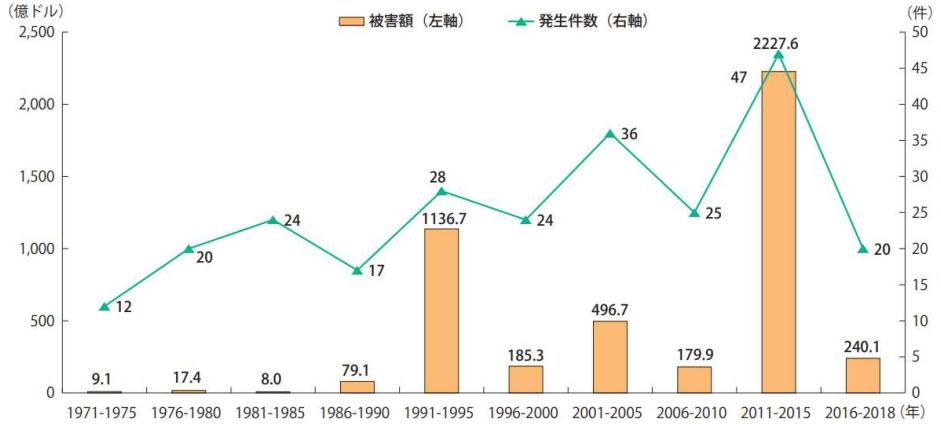
私達の住む日本は自然災害の数が頻発する世界有数の国の一つである。昔から多くの被害を被ってきた。そして、現在日本での自然災害発生件数は増加傾向にある。

1900 年以降の世界の主な自然災害のうち日本で起きている割合



平成 22 年版防災白書、附属資料 30「1900 年以降の主な自然災害の状況」をもとに作成

第3-2-4図　我が国の自然災害発生件数及び被害額の推移



資料：ルーバン・カトリック大学疫学研究所災害データベース（EM-DAT）より中小企業庁作成
(注) 1. 1971年～2018年の自然災害による被害額を集計している。
2. 2018年12月時点でのデータを用いて集計している。
3. EM-DATでは「死者が10人以上」、「被災者が100人以上」、「緊急事態宣言の発令」、「国際救援の要請」のいずれかに該当する事象を「災害」として登録している。

※「2019年版「中小企業白書」｜中小企業庁」より引用

なぜこんなにも災害が多いのか？

日本列島は複数のプレートから成り立っており、地震や噴火活動が活発

→年間の地震発生件数は1,000回以上

急峻な地形

狭い国土利用

台風が頻繁に上陸

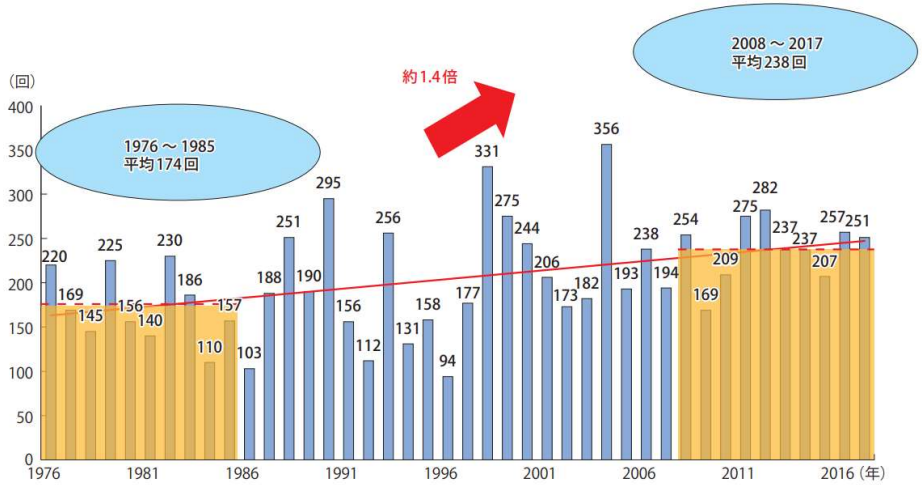
などなど……

さらに…

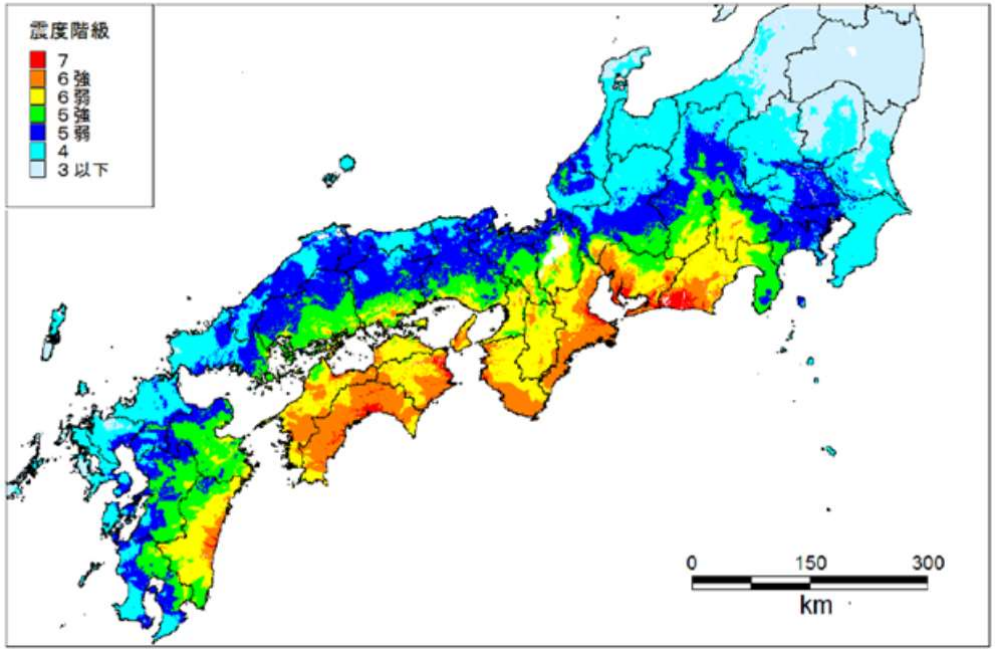
近年の気候変動による集中的な豪雨が発生

南海トラフ巨大地震

第3-2-5図　1時間降水量50mm以上の年間発生回数（アメダス1,000地点あたり）



資料：国土交通省「第3回大規模広域豪雨を踏まえた水災害対策検討小委員会資料」より抜粋



2.提案

自然災害との共生の中で生まれた「防災（BOSAI）」は世界中に広まっているが…

小学生の頃、市民防災センターへ社会見学に行き、学んだことを覚えているだろうか？
自分の家周辺の避難場所、避難経路、危険区域等が頭に入っているだろうか？

→まだまだ防災はその場しのぎのものになっていると感じる。
　より防災が身につく方法が必要

より実体験に近い経験が出来る最新のテーマパークを作ってはどうだろうか？

自然災害防災教育パーク

●ポイント1

多くの自然災害が実体験できる。

・地震：地震体験車ならぬ地震体験フロアを設置。

柔らかいもの（クッション等）や、軽いもの（発泡スチロール等）で出来た町の中から避難するアトラクション。揺れの恐怖、建物が倒壊する恐怖を感じながら、どういった所が倒壊しやすいのかを考え、避難できるかを学ぶ。

・津波：最新技術を使用した津波経験フロアを設置。

VARを頭に装着し、避難に関する2択クイズを出題する。間違えると津波の映像と共に大量のカラーボールに飲み込まれるアトラクション。津波が来る短い間の判断を学ぶ。

・台風（暴風）：風力を実際にかんじることが可能な台風実感フロアを設置。

巨大扇風機を設置し、吹き飛ばされるアトラクション。参加者はバブルサッカー用のバブルを着衣し、怪我がないように行う。風速を上げていき、台風の風の威力を学ぶ。

などなど……　最新の映像技術や疑似体験ツールを使い様々な自然災害を実体験する。

●ポイント2

連携

・小中高との連携

学校の防災教育プログラムの一貫としてテーマパークに来て貰い学ぶ。小学生には怖いと感じる事があるかも知れない。しかし、恐怖心があれば実際に災害に見舞われたときに生きるための行動がとれるのではないだろうか。

・市民防災センターとの連携

全校にある防災センターとの連携を図ることで、各地域の防災意識の高さを調査する。防災意識の低い地域には自然災害防災教育パークへの優待券を配布し、来園を促す。

・日本防災士機構との連携

テーマパークに来ることが、防災士の資格に必要な「防災士養成研修講座」の1講座に値するのはどうだろうか。防災士という資格を広め、若い親に防災士の資格取得を促進させる。防災というものをより深く学ぶ入り口となる。

●ポイント3

海外への防災技術の売り込み

・BOSAI技術の売り込み

　日本は防災技術先進国とも呼ばれているほど、防災技術の水準が高く、注目を集めている。防災は日本の一つの文化として世界に発信できるのではないだろうか。外国人向けに防災製品やシステムを発信できるような展覧会を行う。

3.最後に

私たちの住むこの国が生んだ文化を再度認識し、高めることができるテーマパークがあったらいいなという気持ちで応募した。

先人たちがこの国で生き向くために生まれた文化を大切にしていきたい。